

非核の未来へ言葉を渡し、命をつなぐ手仕事の記録

——岡村幸宣『未来へ 原爆の凶丸木美術館学芸員作業日誌 2011-2016』（新宿書房、二〇二〇年）書評

柿木 伸之

美術館の学芸員の仕事は、実に多岐にわたる。ある芸術家とその作品、あるいは特定の時代の芸術運動とそこから生まれた作品などの専門的な研究を続ける傍ら、展覧会を企画し、その会場に並びべき作品を選定し、さらには作品をめぐる記録を掘り起こさなければならぬ。場合によっては、それをつうじて作品の所在を突き止めなければならないこともあるだろうし、作品を借用するために、困難な交渉に臨まなければならないこともあるだろう。今日では、こうして考証にもとづいて作品の数々を集めるだけでなく、その意義を魅力的に伝える工夫を凝らすことも学芸員に求められている。このとき、作品を観覧者に届ける言葉が決定的な意味を持つことになる。

丸木位里と俊による一連の「原爆の凶」は、その最初の三部が世に送られた一九五〇年代初頭から、そのような言葉ともにあつた。原子爆弾の被害を語ることが禁じられた占領下、丸木俊やヨ

シダヨシエらがみずからの言葉で絵を人々に届けたことは、この作品の歴史の構成要素である。『未来へ 原爆の凶丸木美術館学芸員作業日誌2011-2016』の著者は、「原爆の凶」がこのような「口伝の絵画」であることを嘯みしめながら、それを展示する美術館の学芸員の使命を引き受けている。そして、美術館を訪れる修学旅行者をはじめとする団体客の前に立ち続ける。作品を届けるみずからの言葉を携えて。ただしそのことは、「原爆の凶」を絶えず読み直すことと表裏一体である。

本書の日誌は、東日本大震災が起きた日から始まっている。この「三・一一」の後、例えば第八部《救出》の見方が変わったという。その左隻させきには火災のなかから負傷者が助け出される様子が描かれているが、その余白には胡粉ごみんが施されている。そのことが醸す霧のようなゆらめきは、震災に続いて起きた福島第一原子力発電所の過酷事故の後に人々が直面している、不可視の放射性物質の脅威

を暗示しているのではないか。こうして、作品を扱う学芸員の日々の「作業」のなかで、「原爆の図」が今に語りかけてくるものを読み解くことが、この作品を言葉とともに人々に届けることと一つになつてゐることを、本書に刻まれた日々の記録は物語つてゐる。

その過程で、一つの芸術の姿が見通されてゐることも見逃せない。

東京新聞の記者の言葉を借りて、著者が「非核芸術」と呼ぶ芸術の姿である。この芸術は、「見えない」核の脅威を「見える」ものにして暴き出し、問いただす。そして、作品に結実したその姿を目の当たりにすることは、それぞれの時代にどのような出来事が記憶されてきたのかを確かめ、忘却に抗うことでもある。そのような認識の下、「原爆の図」からヤノベケンジの《サン・チャイルド》(二〇一一年)に至る「非核芸術」の系譜を辿る連載が東京新聞で始まり、それが岩波ブックレット『非核芸術案内——核はどう描かれてきたか』(二〇一三年)に結実するまでの日々が、本書の前半には刻まれている。

この日々著者は、「原爆の図」と向き合いながら、福島第一原発の事故の後に人々の生を脅かす核の問題を見通そうとする芸術を美術館へ迎え入れている。『非核芸術案内』の最終章は、「三・一一以後の非核芸術」と題されているが、そこで批評とともに紹介されている作品の多くは、この日以後に、丸木美術館で展示されたものである。原発の廃墟を前に、放射性物質に曝された身体の実在を声とともに確かめる Chin + Pom の作品をはじめ、路上で核被害者の証言を拾い上げから生成し続ける壺井明の《無主物》(二〇一二年)、自然の物質の組成を変えた人間の業を問いただす安藤栄作の彫刻作品など。『作業日誌』には、これらの展示の舞台裏にあ

る作家との遣り取りなども記されている。

とくに壺井明とのそれは、抗議する路上の人々の群れに混じつていた終わりなき絵を、独特の絵画としてすくい取る言葉の「作業」の様子も映し出して興味深い。そして、画家の希望にもとづいて、《無主物》を小さな展示室の床に置くとき、著者はこの作品に、「原爆の図」と通底するものを見て取つてゐたのではないだろうか。すでにこの「作業日誌」に先立つ『《原爆の図》全国巡回——占領下、100万人が観た!』(新宿書房、二〇一五年)が記録にもとづいて克明に描き出してゐたように、とくにその最初の三部はつねに、占領下で戦争と核に抗う人々のあいだにあつた。そして、ほぼ時を同じくして、峠三吉と四國五郎の合作による「辻詩」が、広島の上で暴力に立ち向かつてゐた。

著者は、二〇一五年の春に旧日本銀行広島支店で開催された四國五郎追悼展を訪れ、「辻詩」をはじめとする四國の作品を見た後に、こう記している。「もし丸木美術館で『四國五郎展』を企画するとしたら、歴史を掘り起こす上でも、『美術』の枠を再考する上でも、意味をもつのではないか」。二〇一六年夏に実現することになる四國五郎展を構想するなかで、また丸木美術館に展示される「三・一一以後の非核芸術」と向き合うなかで、著者は、狭義の「美術」の枠に収まらない「原爆の図」の特質と、まさにそこに含まれるこの作品の可能性について省察を深めていたにちがいない。そして、二〇一五年からの学芸員の「作業」の大きな比重を占めるようになるのは、その可能性を海の向こうで問うための仕事である。

二〇一五年六月二日に「原爆の図」は、アメリカ合州国での巡回展に旅立つが、そのおよそ八か月前に韓国(ソウル)で行なわれた

国際平和博物館会議の席上、著者は韓国の研究者からの質問に答えて、次のような主旨のことを述べたという。「芸術の力が、すぐに世界を変えるとは思えない。けれども、異なる視点の表現に触れることは、固定観念を突き破っていくきっかけになるかもしれない。小石を積み上げるように時間をかけて、少しずつ心を通わせることはできると信じたい」。アメリカでの巡回展は、そこで今なお影響力を保っている「原爆神話」という「固定観念」を乗り越え、人々が海を越えて手を携える回路を切り開く契機となるべく、アメリカン大学を皮切りに始まった。

その会場を二度にわたって訪れ、作品を時間をかけて観ていた一人の年老いた退役軍人の様子を、著者は印象深く記している。たしかに戦後七十年の「原爆の凶」展は、ブルックリンのアート・シーンを彩る展覧会として、ある雑誌で第二位の票を集めるなど、この作品のアメリカでの評価を変える意味があった。しかし著者は、「原爆神話」の影響下にあったであろう一人の観客の心を掴んだことに、より大きな意味を見て取っている。そして、このことは「原爆の凶」に、その潜在力とも言うべき意義を見いだすことでもあろう。それは、一義的なメッセージだけを伝えることのない芸術作品として、異なつた背景を持つ人々のあいだに橋を架ける力である。

この力はすでに「原爆の凶」の誕生の当初から孕まれていて、例えば本書でも触れられる第一部《からす》が一九七二年に描かれた際には、丸木夫妻によって意識されていたかもしれない。ただしそれは今や、作品が人々の運動とともにあつた非西洋における戦後美術の展開とも呼応しながら、チエルノブイリと福島原発事故の後の世界において発揮される。そのことは、二〇一六年の秋に

「原爆の凶」第二部《火》と第六部《原子野》が、ミュンヘンのハウス・デア・クンストでの「Pavilion —— 太平洋と大西洋のあいだの美術 1945-1965」に招聘されたのを観た筆者が感じ取つたことである。戦後の二十年を、とくに非西洋の美術から問う展覧会の冒頭で、「原爆の凶」が重要な位置を占めたことは忘れがたい。

このことは、著者が本書を構成する日誌を記すなかで獲得した「非核」の概念とともに、「非核芸術」とは何でありうるかをあらためて問うものと思われる。「非核」とは、もはや核兵器と「核の平和利用」に抗うだけにとどまるものではない。むしろ核の歴史を惑星的な規模で動かしている命あるものを蔑ろにする態度に、人々が手を携えて立ち向かうことも含まれよう。その可能性を、芸術はどのように指し示しうるのか。この問いに著者は、「原爆の凶」の源泉に遡りながら取り組もうとしているように見える。

本書の二〇一一年の日誌には、丸木位里の故郷である広島県北部の旧飯室村への旅のことが記されている。野猿も出現するその風景の描写は印象深い。この地で位里とともに育つた大道あやの《しかけ花火》（一九七〇年）では、太田川のさまざまな生きものが乱舞する。そこに、あるいは本書で紹介される丸木スマの《河童》にも祝祭的に表われる生命に対する眼差しは、丸木夫妻が「原爆の凶」において、原爆に遭つた者たち一人ひとりの死にざまでもあるほかなかつた生きざまを描くところにも貫かれていよう。そのことを感じ取つてであろうか、著者は二〇一四年の丸木美術館開館記念日の日誌に「命と命のあいだに、線は引かない」と記している。

著者は、歴史によって引かれた線を越えて、時に海を越えて、命の絵画を言葉とともに届け続ける。核の脅威に今も晒されている命

あるものたちのあいだに「少しずつ心を通わせる」回路が開かれることを、そしてこの絵画の「非核芸術」がその媒介になりうることを信じて。「原爆の図」を読み直しながら絶えず磨かれる、絵を手渡す言葉には、ヴァルター・ベンヤミンが「物語作家」のなかで口承の物語について述べているように、「手の痕跡が残っている」。日誌に記される言葉は、絵を掘り起こし、作家やその関係者との交渉を重ねたうえで観る者に届ける学芸員の手仕事のなから紡がれているのだ。このような言葉とともに「原爆の図」を届ける「口伝」の旅は、今も続いている。